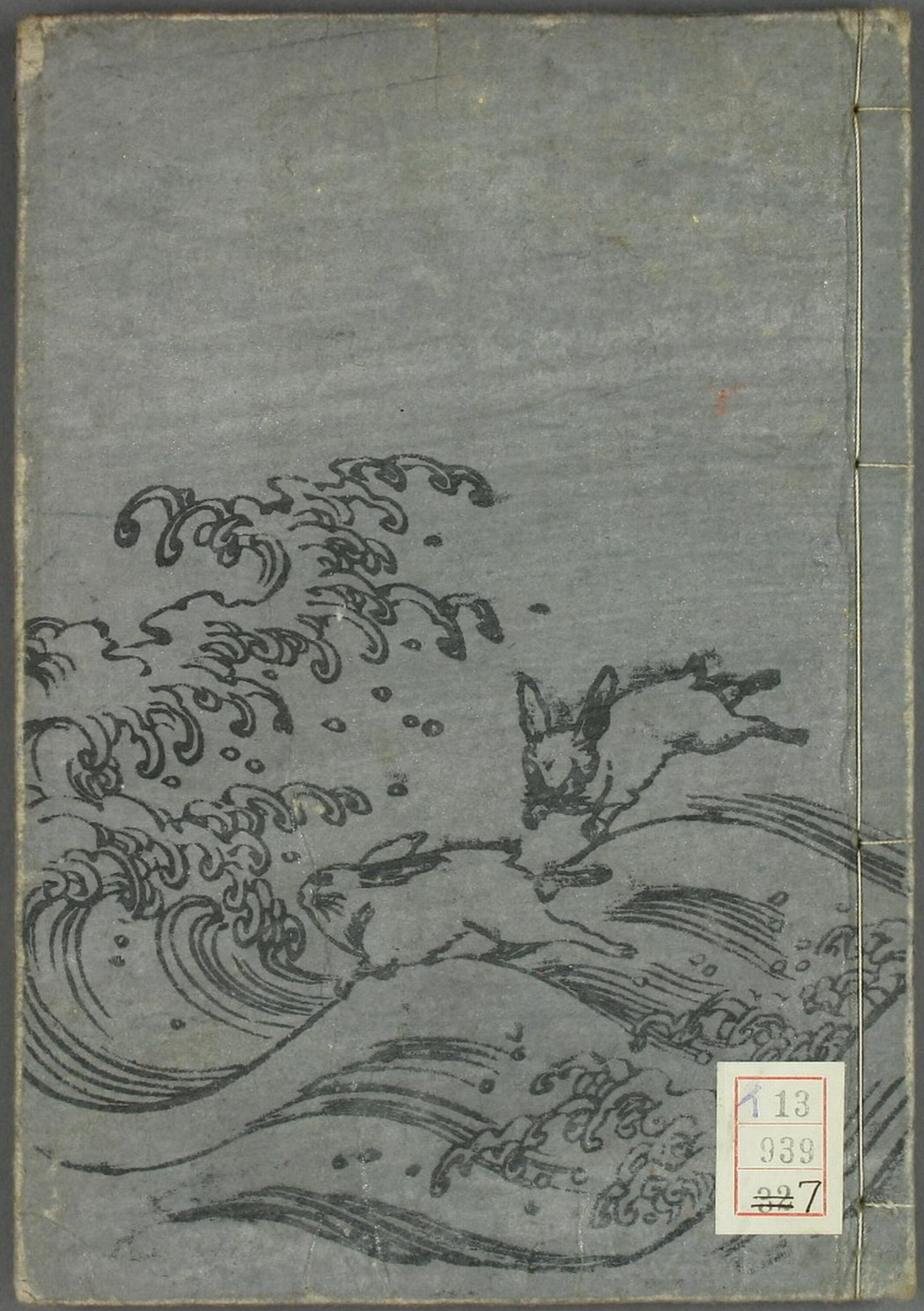

113
939
~~22~~7

門イ 13
939
32

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之二

東都　曲亭主人編輯

文政十三年二月
花房仙次郎氏寄贈

初輯第十三

過去来乃會話
巖堰水の煩襟

吉見冠者義邦は井平が人となり。奴僕まで似けるもまぐれなり。
ある壯佼なりと豫てその朝宿所より倶して還るまで。他事もなく
勤王慰ぶ式は物ふ托弊を儲竊ふ試るめるふ。よろづふいと真成なく。
奸佞なるを絶てなく。ものを文武の才長く。思慮ふくして智計あり。
かるべ鶴ょ義秀を射るる渠が僻事なるぞ。主命黙止るるもの。當
坐の難を固んとく。罪なその身ょ負るなるん。彼時夏が残忍なる家
僕を憐むめるふ孤ども。そを苟みも識るとを況てよくく情を被く。

と見て使ひ繁要のことなり。役ゆかざるべからざるあんと慨ず怨ずるを見て
より捨てざるべからざるあり。井平もまた義邦の士を愛し賢を敬ふ誠心ず感
佩しく。つくづくと思ふやう。あるべの刀祢八浦殿の。ゐん子なりとぞ人いふ。
現田舎ゐん生育の人ど。蕙蘭ものづく餘馨あり。加之才智学問ちん文
君ゐ遥ずまりて後懇しく少年ゑ。ゆしとの君ず仕へるべ。附驥の功をも
成べしゐと思ふ心ゑ傾けく。挙動ぞといふ事。さらなりども時夏ゆ。
疑まんるゑもそまてく。心の底を人ゐ知らせぞ。さるるゑと書載て。
人目ばかりをものびくず。ものがたりゆぞ告ゆる。かくてゆ。八九十日を歴る
程ず。有一日義邦ハ朝夷が安否ゑ問へとく。三二廣光ず小厮を隷く。
ぞぜん庵へ遣せ。ゆ日ハ蘭るまぐかり来ぞ。何とるく心ゆかるべ。井平ゆ
ず由を告迎の人をや遣まべし。又うち捨てくおくべし欲と相潭まく井平ハ。

頭を低く沈吟し。朝夷ぬしハ世の豪傑才智高れく勇ゆまりゆるとかくぶる
仇ずゆとも。ゐでふるゆうひべし然るべく。その道ゑ知て欺くとゑも君子と
いふとも計ずべし。某ゑ仔細ゆまべ三二が信を使のせゐ。うち捨ゆせゆひ
るべ。此後悔ゆやゆん。と真成ず答ゆる甘べ義邦ゆくうち点頭ずまし。
如右ゆるゑ。熟ず人しく問べそぶかるまで不楽しうん。みづからの思れてまち
べし。和殿も赴ゆべやうちち籠ずをる対ゆしまど。さまくハ咎めを
あらじ。なるさゆハ日を暮ゆん。夏の夜行いるるくゑ。ところよしめぞとず。
続く。といそぐく。猛ず割籠偏提るど。物大きゆ調さけく。見を一個の奴
隷ず擔せ井平をゐて出るとゆハ未の刻ちや過ぎず。主後宿呼ゑ出ると躰て。
直ちゆ行ずゆ。一里ゆまず中ての途ゆく。廣光が小厮をゐ。ぞぜん庵
ずと還るゆひう。義邦遥ずゆびゆく。廣光るどく遅ゆず。朝夷ぬしハ

恙なるべしや。除ぐ今朝宿所を出でゝ直に逐命の使ひ来りぬ。又
彼庵へとく赴くべしとぞ。と問ひ給へば。廣光は笑ひて。進み近づきて
小腰を折め。朝夷ぬしへ別條なし。疾退くべしと云ひ捨てゝ。
物くるまも長うるまろ。是腐せ今宵は醒ていつとおのゞ顔を指しゝ呵ことの
うち笑ひ側に立ち井平が目礼をもくけまへば。井平は義邦の容を愛しく
祈とおもふ。忙て宿所を出ぬ。繹の麓に告げ知らせ義邦と共に入りて。
朝夷ぬしの安否を尋ねども。さてまぐれ来るべきたぐひは已に廣光は罷まかり
留守せよ。ときまへば彼人は對面せず。甲夜のほどに還らんぞ。ちろ心得よと
いひまへど。頻に進む主の袂を廣光急に掩とめ。彼処は山麓の孤館なり。
今宵は赴たまふ。願ひ給ふ。止ゝく思召べとの小厮をも倶させ給へ。
井平とのが副まゐらまへば。何でふるゆべきさまは他の重鐵よりも。

身のうち征箭を御ぶ。断腸とともに身甲を重ねよとのあじと
いふ義邦使者ぞ。ある廣光が例の癖狂温子は人の家臣なれば。
扶持まろと三四ケ月譬へ魚と水の如し。さの人あらば許多の後者ぬも
ゆく事足るべし。ときまへば如此ども汝がこゝろ休るあふ。その男子をもはて
ゆくべし。女こゝろ如義邦よ宿所へ退かゝく休足せよ。大儀なりとの
みゝく。彼小厮を労ひ。進む主人をとゞめ見まゝ廣光は立ちぬ。井平が
主のうへ叮嚀ぬ懇ぶ。ことの所より只ならず。吉見を投くかへりけり。
さる程ぬ義邦は日もとや渡ぬとまろ比ぬ。庭門に物
あるべく。入るべうとあるざまに対ふ。食立ちまへつゝとと義邦ぬ太刀へ
臼ぬも譬ふべし大蛇の蟠まるるべしといふぬと驚えるべう。井平共倡声を
立朝夷ぬ恙なるべしや。吉見義邦指まろ。井平も系まゐらぬやいふ。

と呼ばうくるぶさてとよくてそ来るの毒蛇は既に死さるとども其処よりえへ
るかえん背門よりとてそと答る声ゆ義邦も井平も原来彼人恙ゐとむかち
ゆく退たて遥ゆ後方を見えるるに後僕ホは戰慄き一及あまり迯退えつ高
迯足死躓るぶ僵木と倒形勢ゆ井平へさもてそと走ぐく拒たくかうやく
召よせみるるろ共に背門より入るるに義秀は躊躇とてくとと酒死喫てをり
遽しく身を起しく義邦井平を迎へるに曩義は江生を使ゆるるり今又ぶうち
未まあせしへ必定その故あるるるぶとるくよるまやへまんと思ぶるゆへあら孤
どもト絡毒蛇ゆ呑ましへぶ使に来たべた人るるる死折よく来臨あると
しさるるぶる幸ひるるに且井ぶるく語入ると他支もるるく歎待せば義邦へその
大勇を只管感じく小藤死進め今朝しを廣光をまあるるせしゆ返命の暇
くまぶ仏かとのるれるあるぶよるるく媼子ぶさるゆ任せるるるとく来る

途まるく廣光ぶかくるゆ逢ひ既にあん身ゆ恙るるる死先といくどもいくるるめ。
引久さんへさとぶゆく歩いそぶく来るるまぶゆしゆへ仙ぶ毒蛇の変あると
縛の麻使のまるし示しるとと真成に向まるく義秀うち微笑に曩ゆ江生ぶ退る
ところ。さるちよく驚しるへゆるとも先ぶく假寐せし折悪寒さちく驚れ光れ
まぶこの巴蛇ぶ誉よるに身庭へ降る頭へ折戸のわとるるゆあり放きべた
あのるるく孤ぶ弓ゆ箭刺ひく縁頬よるに。その吭をぶさと射るるる死死
心下を刺徹しく十刀あまるるゆ刺留さる。心臓ゆ菴主ト絡へいるの孤ゆる毒
蛇ゆ呑まるく身へそのロゆあり。衣裳の色に孤法師と定るゆへ認されども。
某さんに蛇毒ゆ觸まるく疲労に名れへ賜に偏提の蹟を迎酒獨酌して死れ
彼知へいあるるくれるるとと先ゆ生々庭ゆ出まへ義邦も井平も遠しく後ゆ跟き
死せる毒蛇の頭に尾のくるまぶくるち壊に打めぶりれくく驚嘆しとへ未曾有

の大蛇之蟠るごとく尚かくの如し。引伸さばつゞまるらん朝夷ぬしは天神鈇鳥獲項羽は
いかに勇しと一人が所為ならざれ何人かよく一直に刺とめんことなるべし。と弊齋一稱
賛し。猶謾りまよひて裡面に入るべき点燭ありつゝあるにけり。當下三人商量しさよが
縡の顛末を時夏に告んとて其邦へ状書写めて一個の後僕を召のぼして云云と
まうさ來ぬるを井亜がこにきゝ夕口まきさとゝみと蹔言て躱さ。刀野が宿所へ
遣し又一個の小厮をは消息を廣光に告よしとて吉見へかへし。かくて又齋
る酒肉を井平へ搬せて義秀は祝の盃を勧めるに義秀あつく
餞ひて。冠者の恩義は宜に高かるべしと詳に告ぎとの文相疑ひなき
給ひくるに。加之熅子生。緑坂なく一言の信になりて大かた入とゐる察し
るまかまべ又何なる蔽さん甚しきなんと思ひつけて時夏が卜縉に贈し密書を
とり出せし両人齊しくあきれて東に驚くなるまえ。其中に井平は数回嘆息し。

恥しや朝夷ぬし。某は刀野が為に譜第恩顧のものならねども其家に仕へ奉り。
かゝる無慚なる悪人をさへ容られざるべく。その悪事あらはれなば不義の上を重ねるが
云云とひたすらに冠者の君は尚後ろくゝを告ず運びて。鎌倉殿の覚えもあれば汝ら
匿むに甲斐ありけれど察するに卜縉は朝夷ぬしの寝首を刎んと庭面より
潜びよる折ありしに大蛇の為に命を隕せるなるべし。是則天の応報
善人を害ふ刃は竟にその身を剪くるなるべし。一番き走りて卜縉が
毒蛇に向んとす。あなゞちゆゝしとやらんが義秀うち点頭て如右思ひし
卜縉が綢度を撈さくとの密書をば獲つる。彼時夏が毒悪なる大
蛇にもおとりたりて以前の事を避ん。和殿は素より智計あり。敵をとる
猜同は井平且く沈吟じ彼人郷士なりと父ども北條主時に所縁あまる管
國の守足利殿義兼も等閑ならず欵待さる。虎威を借て竊に猜らへよ。しや

冠者の君といひし人禦ぐ術ありなん欲するといへども死するのみなれば。朝夷ぬし勇あり
とも。あの地にありながら危うかりし賢慮ありと密語は義秀ぬしの一議に及
ばず。某も如右ものゝ恨むらくは哀をまもる今まさるに由ある恩を受て報
ぜず中途にして別るゝとぞいひつゝ頻に嘆息せば義邦も憮然と共に
嘆息し。今この二人志同じくをれども刎頸の友垣を締まへど朝夷ぬしと蔽
屋に留ると称ずして旅より旅に遣んとし愧るにも稀にまりなる幸にして
棄られしが某縮ぬまで死方ありし加賀国石川郡小松の郷なりし荘官が
子に佐味笠内高利といふ壮佼は篤長老に仕しめまで某も亦交わり
彼人は学問ありその性廉直にして賢を敬ひ長老遷化せし後に楽舊里へ
帰るといへども雅書等をに往返して某と疎からぬ和君彼処へ赴きなかば飲て詣
むぞ。某が智音のものゝ赴なんまで遠からぬも再會の時ありやとこの議に
任せまへしといと懇切にきこえければ。義秀ぬしもいと感佩し某素より相識
まける臣今幸に死友を得たり。但外家を憚るべからず亡命の臣を告ぐなべて
みつて袂を分つべく何をの死友といふべき。この席に外人あらねばつゝまでうちを告
おうさん某が母なるものは木曽義仲の愛姫則中三権頭兼遠が女児巴なり。
父は則鎌倉の功臣なる廷尉和田義盛なり。某質弱く病によりて嬰孺にして
父に棄られ膾母を喪ひつかく乳母が懐に抱まれて安房の大猪に落ぬ。
乳母夫婦に養まれて田畝の中に人となれども満禄寺にして文を学び又上総
の広常が舊臣なる健田秀以に武を学べり。青雲の志あるにもあらざれど。
いふせく養父浅江の豊六は眼代鵜堀図内が為に枉死し。養母葉も女は頭髪を
剃て巳の尼と称しつゝ廻國行脚の首途せり。某遂恨するところなくその夜鵜堀が
第へ潜び入て図内親子尼が佛まで父の讐なるものを六人を殂殲して水行

俱利迦羅の大刀暗ま神龍ぞ現ぞ
玄同
蝙蝠や
はだ光
乃
のこを
夕月
夜
冠者義邦
蝶子井平
朝夷義秀

よりて武義が渡り下総に到りて圖らずも健田老人に環會彼れがをりて僅か一年師が病著しくなりて果て藥餌も絶えて功驗なく既にその終に臨み紹介の書を送り忽ち呼吸絶えしが某哀惜の至り堪ぜず真中の野寺に柩を送り遺命に仕へてこの地に来りぬ父義盛が鎌倉殿より恩賜の一刀毋の巴が像見え原は源家の先祖にて世々田満中の遺物とぞ伝へて鋼なれども愛さく不動三奏耶の形俱利迦羅龍を鐫るにて俱利迦羅丸と名づけて養父が仇も件の大蛇もこの刀にて殺彈せり これ武人のひとつけく刀を舎ぶく引拔ば夏なれども寒き蓋城の霜に照らふ月なるぐ銅花秋水光孤現に隠とく刀尖に白龍閃光升るが如し 義邦も甘平も音に伝へ俱利迦羅の大刀にて欲と燭を秉て共に感嘆ぞくりける且くして義秀が刀に納こ傳へ来歴既に盡せり 疑ふくは吉見ぬ 當國桜生の郷士にあるへ塩子生も亦ぞ聰明怜悧下司に仕ぜ願ふ洋に先考先妣はつかぞと同じ義邦を改めとのるまあく告ぐ 自殺の折濱の宿なる屋方へは時夏が父刀野照時追捕の大將なりて馳向ひ恩免あるべしが母を竊に害せし事發覚して照時は自殺しが時夏は執権時の提撕によりて宥られ二の下野へ流されしが後に定うに伝へ聞ぞ時某僅に九歳廣光が兄江嶺に廣通が智計によりて廣光夫婦吾倚に俱して鎌倉を脱出て苟長老は外伯父なるに幸して當國に落ぐ彼長老の愛顧を蒙り廣光夫婦が恩義によりて人となりて孤なりぬ照時自滅の後に父野心なるに幕府は久しく某かくて

あるとの人ども追罰の沙汰もるく呂久さるうもあらじと亦是後ふ亦ふえう暮府へ逝去ましくく左金吾頼家の代とるひとりがよく帰系の路さえうこれあるまくく朝夷ぬ嚴父八則鎌倉殿創業の功臣さう又毋御前八旭将軍義仲朝臣の側室さる古今獨歩の勇婦と世ふけ八今社あと後ふ嚴父のあるを蒙まて鎌倉へ呂久さ王國郡成も領しるるるたひ色さく面を對せ一日よりと廢人まるあるべくくまとそくひーるへ遠ひるどそふまるをもを素性ん後懇しくゆと稱賛大さるるくさとへ美秀愧く席を避某へ和田が三男新将軍家頼と蔓延むいとこどち後父昆弟ふそうーるを和君ふ等しんめるるんや嵬山の片玉へ泥中ふ塗れてをその光王磯硯ん異ん君が性の温順るる共ん公子の風ありとそひひとうとひひけく上坐ふ請をまへ義邦へるまん辞ひくあるれるるいくくゆうん某へ浮浪のめん雑う此軌頼の子と志ん義ふ仗とんふ貴賤を問ぞその長少とうを

るるふ和厳の青春幾許ぞやと問ふ答へ美秀頭成拙十八歳ゆとへるるる美秀うち微笑んんゆとん殊ん深思ん某まへ一歳の兄ん必る推辞めひそとへるる舊の席ふ推居媼子へるふとんんくまへ井平へ小憐成を見ん西君へるるとも名家の嫡流将帥の器どうーまるとるへるるる数るるる孫ども某へ木曽厳の郷内まく渡弘腹心と必まるる桶口次郎兼光が子ふ乳名金刺とへるるめんえ暦元年正月下旬木曽厳対まるひ比親まくへ兼光へ将命成業さてまるる十郎蔵人行家成討んとく五百餘騎を引率一正月のまるめふ華洛をまさく河内國へ馳向ひ軍へ勝まるまるるる帰治の比ふ木曽厳の対死のよ一世のんんる軍兵へみるる落亡く残るへ僅ふ三十騎必死と必ひ決めく造道四塚より東寺の傍とへ歩せるる時ふ源九郎判官義経の郎黨ん原十郎高綱と名告たく百餘騎まく蒐塞ん散こふ攻戦へそのとんん兼光些も驚ぐ三十騎を魚鱗ふ

備刀尖より小人生るよりく縦横五尺ゆ砂立薙伏せ歓の大将原高綱を馬より
撞と砂く落し頻る進んく戦ゆ祖父兼光ゆ由縁ある児玉黨が和漏ゆうち任
く落ゆ上り。摠大将判官殿郷を一大刀巻き奔ん人と計りとなを非覚て忽
地ゆ殊せ居そのとき元某僧ゆ四歳乳母が背ゆ負ま。近江の国賀ゆ落どぎ。
稍六才ゆ成る秋の比乳母ハ持病の積聚重ま。竟ゆ亡ぬ。そ老
母ゆ養ま十とゆ年の終り。あるじの堀さん対ま。よりて元よりの岸もあ元舟
の揖失へるさ。ちく。更ゆ落る上ま。耶の所縁ある。何ぞ寺ゆ奉公し。其処
ゆく読書ゆ習を僧ま学ぶ。吾倩素より孤ゆく乳母が親の老
さ居ゆ養ま。さ。ま人みるゆ。ひく堀子とゆ父が最期も木曾殿の討
死の為体を件の堀が告しうり。かくて年十四のころ。目を病ぶ。て癒る
べき兆ハ清水寺なる観世音を。祈ま。百日普門品を読誦ま。

上。二千度ゆ及び。とぞ。眼疾平愈ま。くけ元名ゆ井平と更ゆ元廷芸薩
の利益ゆく難病平癒の義を取ま。ゆ北條時政ぬ。京都の守護に
ま。某を尚して住持ゆ乞く臣後と。後藤倉ゆ為くかへりまて。ほとり近く
使ま。ゆ彼ゆ公ざる憑。ゆまどゆ。事ゆ鋼ま。仕を辞ゆ。身退んと欲
ま元ハ却ゆ許さ元ぬ。外様へ遠ざけ元ハよりゆ眼ある者とゆ。文学
芸藝ゆ師ゆ就く。形のごく学ぶゆ元かま。けども。ま元ハ執権父子時政時
使ぶ元。と憤激。去こ歳の春の比。ぶく身の暇を乞ひゆ執権ハ
ゆの願書を擲く大ゆ怒り。井平が主ゆとゆ過ぎ元時政ゆ不足ある欲
奇怪へ身の暇ハとゆまぐゆ。又鎌倉ゆも暫べ。ぶど下野へ遣。く刀野太郎ゆ
使せゆんゆ途ゆ逐電せ木を伐草を刈竭しても索出。く頭を刎人との旨
を存せよとゆ。厳く捉させく。人両三人添ま。く刀野ゆ預ぶ。より門客

この頃ごろ世勢ひに當りかくていつとなく奴僕に等しく使はるる。時政はいさ
ゝか思いまどひ時夏のへとうの西君去せ給ふが如し。さる程某不忠死存せざる。去ば
去ば風速死加えゝ彼人の為のみ三さび練めく聽さざる身退くとゝ
本文を守んと思ひ。冠者に知れ有り。假初の
西三月其に仕るつゝ。朝夷に疑はるゝ。今宵の團坐に行くと束帶
去く朝に立とも。面目二五に中まとめる。望足まくゝと。緯精細に述ゝ義
秀つくゝうち仲ゝく。原来この壮佐へ。実父の切臣る兼光が子であるよ。
こゝ義仲の遺腹子と告むやと思ひ久しく只
魯に唱歎まるゝ音を絶ず。義邦は殊更に勝の進む死覺まで共倍に
感嘆し。猛將に後臣とゝども忠義に仕く討とゝはその身死然を沼ざる
あを後奥まどとゝとる。譬は彼兼光は武畧勇悍至双の武士。その

紆行はざ遂に殺戮せられども。その子に又との奇才あり。後奥ゝんの
疑ふべゝまど義邦孤獨の郷士にゝく。士を養ふに禄足まど賢者を扶持まる徳
ゝく只管捨ゝゝ死ゝひあり。今よる五侑に仕へるに食死ゝうちて養ふ。
温子がまゝゝゝにまでも。と問まく井平頭をうち掉。この紙は幾死沼ざ時
夏は能と媚に已に猜まるゝの心彰む。某冠者に仕へるゝ。彼人こゝ死歌人や執
檜に告領主に祈。義邦復さんと謀るゝ。兄禍を招くに似ゝり。いの〳〵の人のゝ
あるゝ士は已を去るゝ為に死ゝ女は已を訪ぶゝ為に貌く。某只管崇をあを
まく後ゝとまゝとにあゝど。ゝ勇もとゝの故死ゝく。君に禍あゝせじと深く
念じまゝまのゝ朝夷ゝ別を告く。他郷へ赴死ゝひるゝ時夏躰く某を呂
ゝさんと疑ひ思ゝのゝ惜ゝく推辞ゝく。時夏必怒死結ん只ゝゝゝ三ゝと
告ゝ某をゝ〳〵ゝ某彼処ゝかゝゝとゝとゝ心は君ゝゝとゝまに有ゝゝ。ゝん大事

あらんまゝに死をりく恩義ゐ報せんゐ何でゝとろひべえ。いまゞ曉まのかゞや時
夏ぶいく怒く某を遠離るゐ冠者ま顔けまぼへまるこのゝ死告さまて。
渠をうさんゐるえよまて某ゐ人ゐ為のゐゐぽうろうぶぬまぢ死のこ書つけくちのび
ちのびゐ時夏ま告さうた如此せざまえゐ彼人ゐ疑まんとおゝべとくゐ時死
やちゐと真成ゐ練ーえ義邦頭ゐ言死掉く。時夏何等の人ゐまえかゆぞゐ
えち奸智ゐ長くる教らく縛の廻。胄隱ゐ義めたま和さべく。と諾ひさる。田答ゐ義
秀さもてそと共侶ゐうち点改冠者へ練死容るエ江河の苡を容るが如し。時
夏ちゐ来ることあゝへ某假ゐ井平ゞ過失を勸解さかーるん彼人とのいで来ぬ
隙ゐ紹ゆの書状さびてんや。といそゞせへ義邦へ硯筥を探まとり墨さり流と
さやくと支書まる程ゐ江三二廣光へ小厠二人ゐ松とりさせく。背門口より進
い入まへ井平へ出迎く。ゆゞ彼毒蛇のゐ死告。その他のゐ死密語ゐ。そゞ程ゐ義

邦へ件の書状を写どりとく。義秀ゐうち數ひ翌へ餞別ーく送まゐゐを
べまとも今よまーくゆうをえ北國ゐ赴死ゐひく。なゐくゐ仕よくとゐ美春
雁の飯る比ゆへゐ里ゐ来く遊び多へそまぐゆへ幾遍も信を他のまほ。
佐味生ゐもとまゐのよ死言伝ゐ人と契ゐる。彼一通死遞与ゐゐ人義秀を
辱ーと右ひゐ受く燈燭ゐ。さーよまゐく完名をゐく。躰く懐ゐ挾めゐ義
邦へ廣光を召よせく對面を當下廣光へ義秀ゞ武勇を稱誉て。その
恙ゐ死敬びさて義邦ゐ来ゐうを刀野とゐ人遣さまー。その使もをや
選りぬ彼人へ程ゐゐく。さくゐ来会せんとも。このゐ死告まうをべく。又仇安否も
をゐまーさゐ使の男を休せく。別ゐ二人の小厠を引く。某系まゐ。といゐぞ
義邦左右をえゝ。をゐゝへ媼子へ廣光共侶。安く吉見へかゝりゐ人時夏ゞ
猶末ゐゞ便なくーそといそゞせへ井平伺くまを出寔ゐ宜ゐとの如ー。

さろまに江生ハ今朝よりまたく往返ふ疲労のひけあ。今宵ハよくふ語り明して。朝夷ぬ死送りぞてふ翌ハ戴星ニ退出又某ものまた先退んといひて続松とりおろしくたゝ出んとすれば義邦急ぎ呼ぶかゝる折ふし夜をこめて出立遣えハ公りとて小厠ハまふ明さを要る。二人ともに伴ひ出ぎ働とまく口のあとまふ耳をさゝよせ朝夷ぬく餞別又単衣夾衣ことまてハ浅良井ふまく沼さゝく絶宵准物させのくと弊せるしく示さまして芹平頻ふうち点灯小厠ハ松明を把ふ出ろ。慌忙き出去ぬり。かくて義邦ハ又盃を更めく。廣光が疲労を慰め義秀ハ芹平が来歴素性をおちもるく告ふ。廣光只管感嘆。君ハ君ハ君ハ西雄の翼を得させのひゝぶ行を愚ひぐ。ひと鎖ゝくゆと窺ふこまふ祝ゝけり。この物語のほどくふ時夏ハもや来ぬ。ゆとるどもその夜ハ音もせを天明く後ふ時夏ハ八九人の後者を得て領主足利義兼の月代ハ嶋室平師任ふ相俱ゝく騎馬ハ歩せまく。柴門の内塞ハくへるもあぐれが矢庭ふ色を推倒させて馬より内ぐと飛下ぬく。師任ふ業内ハく。真先まそ進ませける義邦ハ庭門まで廣光を得て出迎へ師任ふ対面て義秀が武勇の働き毒蛇退治の経緯告ふとまれば時夏ハ働とまく推賞。件の大蛇を佶と見ゝく。ト猪が横死を憐ミ嗚呼この八道微ませば朝夷ハまで毒蛇を刺留人さふ思さぞや。と師任が袂を引ぬ。ハ死ぬく寔ふ和殿の宜ふ如ゝ。察ハる礼ト猪ハ刃を掉く毒蛇ふ對ひ心下を刺さまして。蛇毒ふ觸く裟撓ミ竟ふその刃死ハ雲ふ彼族人が射留ゝるくんまたその功菴主ふ申まとの。鄙語ふらふ死人ハ口ハ大骨折く鷹ふ捉る。不便の寄期ハひと合掌打く嘉ハ言ハ義秀ハ席を譲ぬく。時夏ふ、ち對ひ菴ハ死向ぞうちまて立く母屋ふ登ハ義秀

主ト爲横死あつ可し其は某ちつ如きをとしに陸奥の久すなは紡ふべし親戚あり今
朝しを直ふ別れ告て奥へ赴んと思ひ心就ては家臣猥子井平某西忍ふ
遠離らぬうぢ勘氣の蒙しが後こよりなく心よろしからん某が置土産よ。
とのゐ勘解まうを舊のごとく召使ひれなりしと述しかハ時夏ハ若笑しく
いろへ而至極せり發足のる久留るふよろし和殿の意ハ任せ井平ともに
黙止くし召えをべう思へハ。ちうろまるろけれさそと初ゐへ言変りて強面き
囲碁ふ義邦主役憎しと思へど義秀ハ恨さる氣色ろく今ハ長居ハ益え。
すや退出んと両刀を跨へうずう縁頬ふきゐなく撐下と尻をみ脚半の紐を
引結びて笠ふうくとうち被り悠然として出て去義邦も遽しく別を告て
共倡ふ出んとせしハ時夏ハ扇をめく推禁め吉見どの麁忽ろみぐん菴主の
横死大蛇の好景實ふ非常の吏ゐるまへ私ふとうと置ませど領主ふ訴まり。
監定使を下されしふ彼義秀ハ和殿が容え彼のの他郷へ退てとも和殿主従て
そまえ雉ゑ岡と雉ふ替ん免許を兼てのこが隨從ならしと冷笑へハ師
任も眼ゐ睜て吉見冠者ハ年いとうくて其訊へさつうへ付きとも老僕
二八さもあらじ吏果るまでよく守せよおんづ近郷よ夫樵夫木を召よせて
鋸めく毒蛇を伐らせ又荘客們を召とううく岍の裙ふ穴を掘らせ件の毒
蛇を焼捨へしかくて八一ト日ふ成ぬしに衆皆さつふ逗留せよとハ長途の往来便
ゐえ所わえとくめどもを集合よとく後者をころちく祖近き山里へ遣し
けて義邦ハ勤ふ引禁られつく義秀を送るとかろの務ハ忙然として世んさ
あるを二ハ今て時夏が彼人の啓わを送て世ととく謀るたとまくも毒悪奸
狩憎むべし傾くしと頻よ憂悶れども目代に憚りて为を脱るべうえ下りしをとろく
廣光も心を病しく村おきさる稀ふ亭午よゐるまて人夫木聚會次の日乃黄昏ふ

件の毒蛇を焼竭ート猪を莽果るまかくく義邦ハ樵夫荘容们ゐろ共ゐ宿呼へ
還る工夫幷さまを今ハ〜と義秀ゐ追著る邑と焦燥のく六日の菖蒲を蒼ゐ泳め
十日の菊を離ゐ採るまつもとんとのくぶうえゐ。岩ゐ堰まー苔清水濁まる人の後ゐ
跟さト猪庵を退出つ。途よまを安う安くう別まを廣光と目をあして主後齊一嘆
息ー。戸ことく吉見ゐる宿呼へうまを若ろろ真夜中ちくなうゐけまを。

初輯第十四

幼柳乃廿廿芽

巖神の地藏會

あまくるのこぶらのよしてぐぜんあ
朝夷三郎義秀ハト猪庵を立出く。途まぐ領主の目代まゐまをハ
対者ハかくるゐ祖あぐをゐハとの地の名残ゐり。行憚のあぐ元ぞ吉見ゐゐあて
彼邪ゐ俠人と輒ま尋思ーつ躭く義邦の宿呼ゐ赴き潜ゐゐ門ハ芽平出迎く。
大ゐま歓び立よくせのゐるゐハ必定とゐひゐぐゐ。遅ゐを遍ゐ小厮を門

あぐ出ーまを。あぐまゐくを子舎、僧で湯をまを。あぐぐゐるどてあゐ共ゐ異
ゐへざまを人と呼向まを。義秀ハト猪庵の繆の麁時夏師任がいひまを。
ゐちまをゐく物ゐまをハ芽平ゆのく胃根をまをの世。公ゐゐ射者ハ役あまをゐん雲時
ゐゐまをまを甘ゐを人と真成ゐ曾待く漁猟。酒有を按排ゐ盃三順ゐ及ぶまを。
三二廣光ゐ妻浅良井ハ衣裳ゐ更て義秀ゐ疑待の浅ゐ
嶋立を祝せーゐ義秀ハ疑待の浅ゐ盃をまを。浅
良井ハまを愛ゐ数ゐあゐ婦女子ゐ。ゐで勇士のゐ盃を穢ゐ願ゐを
ゐぶ子ゐゐまを君ゐ武勇ゐ類ゐ世主の為親ゐゐ名を揚。家ゐを奥ま。
冥加あゐせゐゐ孫とゐひゐく後方をゐ人まを。やよ小三二よ。とく系まをちん盃を
ゐまをう。と呼まを。門唯と応ゐ廣光ゐ一子小三二ハ憶ーゐ氣色ゐく。遠ーく
麦まをまく母の側ゐ侍ゐゐん浅良井ハゐぶ子の項ゐ覚ゐけく額ゐ。せまを

浅良井芹
平義秀が
餞別す

芹平

小ゑ

あさら井

廣光が弟子なり。小三二と呼ぶ。あん目をあらはしてよのつねの義秀うち
つくく指をよせ現に健なる生育ありぬ年八歳才ぞと同みくくその横顔をさー
視げば小三二八細小なる。右手の指を開たり。示せば義秀うち点頭さて八五才ぬ
なるまるほど年ごろ倍く怜悧げ。もん角八君父に不足なし義秀何等乃徳
ありく類せんとく盃をとり但この席に列るまぐの織ぬとと盃とさせば
母親さー喜さくゆ祝宴そそく戴せ挑子をとりて一酌落さぬ程うに飲
盡させ又義秀に勧めけるあるぬ叮嚀なるぬ必らずと時根は夏の
日の影衰へく端居涼しくなるめうに義邦主従かへるまぎれ義秀ふく
沃まく今まであるの故宅なるに彼師任ぬ引とあくまく脱るる路のなるなる
べし斯とらば彼処にく辞別をべうとぬ今一トしび對面せで遠慮限なるのれば
ちら及ばぬ所に。かへるのよ紙やるべといひつと外面をうち作ぎ

井平も又沃まく。これ全く時夏が所為なるべ。と必くども。淺良井共侶弊を竭
くく且くれと先ぶ義秀竟に住まぎ。是紙と彼紙八間近くもあるぎ乃
帰宅を楽んとくり止宿さる程ぬもるべ投くゆくるるの先有ぬ吉見ぬ隠
まくくをまるぬど奸佞人ぬよ笑るべ昨通霄酒ぬ明くくいべたとへいと
果つ。女こきく名残を惜んや。一千里ぬ三里ぬ三里ぬ三里いまたく宿を投めるん。
かくまく日まるるる饗応。歓びハ述竭くるに来春八又遠歴して必安否ど紙
まうさんをのく自愛ぬるるとひうけく立んとを理まるるに八淺良井ぬ昨夕
猛ぬ刺立さる行衣裳ぬ一包の路費をとりまくくくくく恭くく義秀がもとりぬ
さーよせこれ進せよと豫くいるに。義邦が賺るるまるせめくくいるをと八辞ひ
るるど。ちん刃ぬ著させるんに。とりるぬ義秀るん久りくく送るるるの先冠者の賜
めいるでる推辞ゆべ先さるに衣裳八外物ん某衣の薇るる紙恥とせどり義ぬ

背ぞ。よりあるを恥て路費ハ故郷ぞ生るとて母のまゐりしが。ゐるは餘りあまこれへ
こゝぶ又まん日おぐ頭まゐくをるとのひあくど。再び立んとする程よ。淺良井
瞞さ引とぶ。ぞ受させまゐでハ留守をる甲斐も待ぬ。あゞぶこゝを
をゐ。ゐのくみ待らんや切くこまをへ納め多と苦みをめくべ。義秀遂よ
意ぞ枉く新た衣よ脱ゑ舊さる衣ハ殊さうゐいと惜げ畳けけく。
扇を開て是ゐ載せ江の内室ゐ遷むとあまこ。ハ舊里ゐあまし時母ぐ織
の夏衣へ肩瞞ハ蔽まてゐ。ぶるまハ綾羅ゐまくさよゐたあゐりを。
ゐたよ物ゐハまハ且く是ぞ質とくく留ちんとゐゐへ葛籠塞ゐぶた。
且く領まさまくとゐ淺良井ハその孝心と。廉直ゐるゐ感佩くく聊を亦
ぞ推辞ぞ。ゐゐゐ甚さゐ為ゐ為まゐまぶ垢つた汚さう。代ひゐけど
洗濯くゐく秘ゐた為ゐまく。とゐゐ義秀大ゐゐ歎び驚の狠懐まくく。

淺良井ゐゐ別を告たゐ外面ゐ出くぶ井平ハあるゐゐ代く里盡ゐまで送ゐゐ
ゐん義秀ゐぶく辞を是ども。ゐは別ゐゐ沼忍ぞ。二三十町まゐゐれぞ義秀ゐ
ぞ是ぞたゐりく並木の松よ尻をゐけ。温子。ゐさ日の暮べたよ。この処より墨を
ゐ時夏ゐゐまゐゐゐ和歌のゐるよゐたとあゐ。とくく。とゐそぶぞゐ井平ハ
さゐゐ為さぞ。某いゐでゐ才のゐゐゐ彼人をゐそゐぶた答ゐ歌ハ両君ゐ
ゐんゐをゐべ。今豪傑ゐ雖迫くく教を稟る日久くゐぞ。感む所ゐ今
又公の疑惑あり。願ハ君の明断よゐゐん鄙よ告ゐ世ども。某ゐ父兼光ハ
木曽殿の男臣ゐ。義高（木曽義仲の子頼朝の女婿）ゐ今ゐ。ゐまくゐ某とまゐ仕ゐゐ木
曽殿撃まゐひ比件の君ハ武義ゐ入間の川の畔まくく命ぞ隕ゐ世ゐゐぬ。
と後ゐ仲くくゐ惜ゐても。注ゐたゐハ只主家の滅亡勲ゐ時政ぬゐ仕くゐゐ
との恥ゐまゐ刀野をゐくく義邦ぬゐ仕んとまゐどもかゐゐぞ。又和君ゐも隨ひ

かくてさるべきとき刀野が家のあるところぶ吉見とのゐるの謀ふぶ福禍窮こ主を
責るゑ又時夏ぶゐるの謀く義邦を陷るるぶ桀と佐く堯を討んとるこ禍
必べ一十日も。とあくとの地を脱去く。天運の任せん欲許しあらぐ和君の後ひ走
らんと必るのこといくへ義秀既禍うちに掉とのゐる甚ちるぐるこぶ義邦ハ和殿をめて
既の佐をゐるくりといくて。さる禍今辞せざるてとこ禍捨るハ不義るるぶやカ
之和殿も支ふハ時夏怒くこるこてを逐ひ義邦を陷めるん是禍必ひ彼を必へ。
ちの住るのおとめ。ひ愚意禍ひく推とれハ刀野ハ和殿ぶ主君るるぶ。
吉見も和殿ぶ主君のあるぶ主るるぶ後ふめへ勢ひ敵しかれ有ん主
るぶぶくく捨るこれハその志同じれ有ん渠禍去んとこるこどもゐるぶこるを
佐んとこるとも沿どハ黙しくるづるの時を俟べ。白龍も時を得ずして蚯蚓と
究を共のとれハ蜉蝣のゐの苦めふ虎。こるも亦天ゐり命ん和殿逐電こるの

及びく義邦のゐのるハ脱去るこ禍可ん去く禍を逃さんるハ謀のよろしれの
あるど義秀乃和殿と舊縁あり然とく今ハ告ゐこるも亦時を俟べ。よりて
聊も蔽ことるく愚意の判断かくの如し。鄙語のいハ釋迦の仏まへの経を誦む
類るるんとくかへるるとりの井平ふく感伏しく更の又一後よ及ぶこと言うけ
ゐりるひぬ某不肖ん乃ハ縁く教を守らんくさくも再会の時を俟
なるといひく嗟嘆さる程の義秀ハ獨と刀を起。さるべきてのく決を分ん冠
者の言ゐるひ稔といひあへど踵を旋し北四禍投く去のるこるハ井平ゐ遠く
うるまぐ後影を目送さる遂ふ吉見へ還るる。さあ程の義秀ハその日ハ僅の
三里のく里の白屋ふ宿を投め次の日夙ふ出こるこども路費とく乏しくこと
あるど素より急ぐ旅るるの越路ハ殊さる名所多るる途のなくての名山
霊地を拜おがやとるひしくるる山のあへべ山ふ接び水のあへべ水禍訖び旅ふる

張ふ日を弥まに越の州まくさゆるる。秋の初風をむくつ。ゆひの外ふ日ろ
へ経く。七月の廿日あまるふ信濃越後の界ふ跨る越中四新川郡佛岳の麓を
過まて。婦負郡岩神といふ里を過るふ。さや黄昏ふるまるふこの日ハ九
四日ゐまにハ地蔵まつまと思ふく。家毎まそ〜げる燈籠を出〜。証を
鳴〜。鼓を鳴〜。童男童女うち雑てさまくゐる燈籠を頭ま載き茜染の
浴衣のおひ〜ゐまを被ゐまを被ゐまあまに弐ハ縹繻ま褐木賊今宵を晴と打扮
ゐん具首ふ一隊彼首ふ一隊あるで態ふ躍るゐり。鄙まふあまどめづらゐる。
ゐんあまとと立ちあまくゐるとふなゐまと日ハ暮つ。かく宿まふ投ゐふ今宵ハ
拵ぶ日ゐまにとて。いづまの家も宿を貸さまど。せんまべもゐくあたくく里書盈れあで
末ふ々れば人貪猛ま走りちづく。後ゐる町ふ筏猾あまとそハ山の主ふやあん。
側杖ふ打ゐると禁るもあまと。なくそあまくく門ハ戸を鎖灯ふうち滅く。

寂莫と扣さみ〜く。如法暗夜ふゐり〜ゐ民秀旅宿の便ふ失ひゐ前面
ふ人家ふやあると。けどあく青田のまゐる。蜘ふふ似ゐる田の畔の前後定ゐ
ゐぶまふいつの程ふ途迷さまて。その夜初更の比及ふ郷ふ過まて岩
神の里盡処ふ遣まふ来ふゐり。とふいふふと呆まと果く。とふまび右ひゐる樹
立の間ふ引入まてゐる家あまとあづく。火の光隠ことてそれ。よふ憑〜ん
ちちーつこの横巷路ま進ま入ると二町ばゐまに果〜くゐ。ちのぬ。
いと大ゐる家あまとけり。夜目ゐまどこの里ふく富るのふやあんどぶん。
南面ふ衡門あまま。裡面まふ炉ゐる冬木ふゐまる角門ゐる扇を推まふ。おのづ
ゐ厠ふ〜ふ。鶏と入〜又ま〜ふ左ひの方まふ牛小屋あまま。穀倉三ツゐ四ツゐ
あまて前面ハ則母屋ゐり。樓ま簾ゐけまて〜く燈燭の光鮮明ふ遥ふ〜ハ
との燭ゐ〜。庖湢のゐふ人鞍置こと声まふ立まふく門ふ小厠とあづき

あ出さく細ふ戸を引開つくと透し見くに何人ぞと問ふに義秀い慇懃ふ申を
くるよ紙告ふるまで宿りを投ふ件の男ハよくを作るどあるところる
の人りぞある今宵さてゆうまつくいと難義ふるまぢあまぢ主も家隷も驚
渋まてくまぢ夜食まふるい毛ど泣ふ口説ふ商賣の最中ふるの紙ふんでふ人を
留むべ元あるくふヤスまでも臣外ふ退ふまく投ふ人とのひあくど開ふけふる戸紙
さそんとまる程ふ義秀息ふ吟とぶ。さるうまハき折と作ふく。乞求ふんむぢんふ
仍くまど。鄙語ふいふ隣とも商量数ふるふ孫ども某ハ両刀を腰ふ帯ふり偽
ふまふ黙くのふあふど縁故を知ふしふるぢ直愛紙慰ふるよすがとおふん欲いふる
るぞ作ふまふ他言ハ絶くまふとふ大ふるを説示ふ人とふまふるくいふまてく
古打鳴ふいふとも無益のふるのぢふさふぶあん男ぶ乞ふまふふそのあふはを告
あうさん今宵あるぢの愛女ぶ燈籠舞踏を見ふ出く悪根ふ奪れふ。紙

救ふべ元作ふうままぢあるぢ夫婦ぶ憂苦悲歎さそと思ひ女ま見宿貸ぢふハ
この故ん。とく出見と遠く。又戸を開ん。とふ紙掛まハ義秀を戸ふ申を掛く。
露ぢふまを動せぢ。その後ふくハ究く易ふまを某既ふ今愛紙救ひとうて作ふ。
あるぢふまを告見。とふまてく走ふまハふんとせぢ。ふぶつふるぶふどふんふそて。
いふふく、そまハ偽ふるふん人のちふで救ふるまるるぶふ歎ん。この里ふ人橋渡
ても。あるぢふ財を盡ても。かふふべうをあふざふふ西刀ハ誰も佩独ふとそ宿りもふ。
投ふ移ふる他郷の人ぶ移ふとも作ふふハふるふふ。その今弱ハ何処ふふる。ふく来
ふぢ遠与ふ人とふふせを果ぢ義秀ハ呵くと冷笑ひ原来吾倩を疑ひふふ。
現両刀ハ誰も佩世畏過半ハ武士ふまども。賢不肖ふまを剛億ふまを一槊ハく
論ぜんや。娘女子を移くまるとも。その親ふまで雖ふ遠与人暇ふまとのひふて
ふ。此ふぢハ外面ふまを引さそんとまふ。小厨ハ瞞く敷居ふうち乗まを北月紙

柱かたくせつくみ足を張く用させぶ。嗚呼堪うる。脇が折まる。誰も不よ彼を
まくこと能ず救へと叫び一ぶ。この向荅ず必つるの両三人ニ人ニ。ちく戸が挾ま
き一件の男をいくく叱りて退うせ客人且くおうこせ人宮ふよ成あぶが告く。
田荅おうきんと他皮ろく勸解こそ。おく奥が走り入まる人。とびろまふて音も
せぶど猶ようちく老僕とおぶーき四十あまりのととと生く。義秀が名字と同あぶが
見えなんとおうこうる且さいろ人とのひ子く今いふ玄関の式墨が誘引はく。
菅笠うち布く義秀が尻を掛させ小鍬を石く大元ろる盥が湯を汲入まと
させく足成濯せるぶーこ。初ふ人似ま叮嚀。かくて客房が案内しん燭臺
二臺並建さまん昏のとぐいと明うまる義秀ハ坐ふ。あぶの生る成俟わどが。
を男の童湯成ぎむそみ磁器さへふ鄙ま似げるくいと浄う。床の間ふハ御高き。
堆朱の臺が紺青石の置物しく。佛繪師良秀が不動の懸幅を掛こまる活花

あまと香の煙細ゆゆぞ立沖る地藏ハ不動の本地るまハけふのあふ拝ろるふやと
ふふ且くしくあぶの翁對面と手齢ハ五十あまりるぶ。越の麻衣よ青葉
紗の袴を穿ろう。實主の坐定まるく。あぶがいふ申ふ不意も客人いろぶ女児と
救ひとこせるひーとうけるる。実るるるんふハ是再生の高恩なり。何丸
まぶ使ひる巳巨細よ知しるへとのふ義秀ハ使くうち点改現ふさるるのひう。
ろうまとも名の同じたあまと面の似るるあり。世間が女児を畧ら是ふ。
翁のくふ限るべうぶど公翁の産業令愛の手紀骨相奪畧ろう悪棍の姓名住
呼成祥よ現示一見言符合さろと成ハ令愛を遮与ぶ一。このる成告んるふ推て
宿ア成投一といろまくあぶハ小騰成進め宮ふ呼その理あまと某ハ稲向氏名ろ
判五と呼くめこ先祖相美の田園百町よある成りく里入綽號一こ百田の
阿爺とのへまと一女あり男児是女児ハ友鶴と名けろう。今茲十八歳まぞるりぬ頼

友鶴薄
暮燈籠
洋踏を覗る
地藏大菩薩
友鶴

地藏大菩薩

色も醜かれども心ざま親に孝に嘗て佳婿を擇むにいまださせる婿がなかりし深窓に養ふ月を外をバ絶て見せざれどもとの郷ハ宝珠山地蔵尊寺といふ蘭若あり年の文月廿四日ハ本尊の齋會なれバ寺ハさらなり里さへ燈籠を掲出し或ハ舞踊を與行し良賤發夢遊山の日なれバ愚老ハ則件の寺の檀越にハが友鶴ハ幼少より里好みて地蔵菩薩を信じ去年十二といふ秋の比より日毎に地蔵経を讀誦するを今におこたる間断なし。かくまで信ずれバ佛にてましませバ則女児が情願に任せ納涼がてらに曛昏より奴婢三四人冊けて地蔵尊寺へまゐらせしに不慮に悪棍に奪れたり。その悪棍に豪首あり氏ハ日理名ハ魔平太潜称して山の主といへり原ハ奥の泰衡が残黨とぞ聞えたる今見に劒岳のこなたに近き山麓にあり。くだんの魔平太陸奥より當國に落きて遂に夥の支黨を聚合て彼此に横行させ動もすれバ。

里人を打擲して錢を出させ又殺さずして或ハ恣に集変晩稲を刈とらせて坐しておのが腹を肥し或ハ里の女の子を捉へて白晝に輪姦し殊に美目よき婦女子をバ魔平太ひとり嘗翫して年を歴れども恣ままに懸兮弊に竭しかくて寔に鳴手の癖者なれども山里の甲斐なき遠さ懇術ハ由なし。加旃いぬる正治元年の正月十三日。鎌倉の幕府将軍頼朝卿逝去ましてより以来新将軍家頼家朝臣のおん政正しからざるさまなれバにや奥のくまにハ泰衡が残黨蜂起し又近江比越後にハ城小太郎資盛ぬし謀叛して東軍と合戦し遂に落城に及ぶといへバ越路ハ今に静ならざるよしなれバ郡司縣椽荘の別當なども化のえざる人くも土賊を捕るに遑あらず國の爲に奸を鋤民の愁を除んとおもふものハ稀にて魔平太ホハ時を得たりと横行して王法をも憚らず武威を屑とせずおのが隨なる倨驕奢を極めて。今猶飽足ずとおもふなるべし某ハ里の長まで家属多ければ

かゝる振舞を事あらしめしとの事素彼ホゴ乱妨ホあざ〻ホ悔ーくと地蔵まろうホ最愛の女児を奪ま慚愧周章今さらホ決定さる主意を告る所符合せざ女児を返ーヨうと落涙ろくぞ口説ける義秀ハつくくと伊のく握る拳を捺ま原来その魔平太奴ハ免ーかゝ兒癖者く某いまゴ今愛を救ひとゝろホあらぬ然とて宿ま投入ろホ勘ろくくろろいくほホあらぬ善ホハ與ー悪を罰ー弱を扶く強を折く是某ゴ一癖ゑ嚮ま街衢の騒動風声今又さらホ立ホまくその厄難を他ゴーうハん過ぎホ忍びざるく対面ーく一臂の力を技んとらひホまぶ如此ゝと辞を設さまぶとて豪家の主人と驚働ませく精細ホ他くと為ゴ一小厠一人貸ホ今ホまま剣岳と中ろん彼悪棍ゴ宿所ホ赴き魔平太ホを絶殺ーく今愛を救く来ろん躊躇ホふとろとらホ判五ハ呆ま果く瞬もせざうち熟視ま。ある能ホ一ゑ客入ろ早倒も敵ま

よるのぞろん身長六尺有高肥膏つゑ力あまとも彼魔平太ハ鼻雄ま力人ろゝくのホいホあゝど加以その心ホ属を侍悪棍垂慮九餘人越の赤熊太三九二中太夷守水六臭水の沼太郎ろど呼ぶくホ万夫無當の力士ろり。

撃剣巻法相撲のホらぶまも沼ざる所なゑま三面六臂月あまぶとく。らろホく彼ホま敵せん毛を吹く痲を求ろぶ後悔其効ホ。ちろ。ま用ゝくと為抗て頭を掉まハ呆ハ呵くとうち笑ひ勝負ハ人の気少ホよゝど翁ハ仇の勇を知まとろホ。ホまぶ某ゴ勇を知ゝ。ぶ嘗舊里を出るとゑ親の讐敵六人を殺て弾せーまとの大力ん敵ホ百人のちゝろホあまぶ一千人のちゝろホあまと何のおそれろひぶゑ聊本夏氏試ゝ見人とらひろく左右を見ゝ。床柱のひとろろ基盤と。ぶ引よ寄ゝく。僅ホ右の指をうけく。且く繁く燭臺ろ。蠟燭の灯を扇ーくん。只一トホあぶホ打滅ーつ。かゝく基盤ま壁をうけて推ゝと思ゝ忽地ホ四の脚折摧て

簀子の下まで滅込けり。かゝる力士も世にハ亦あるべからずと舌を巻く。かれらの翁ハ又さらに呆るゝ半晌ばかり。義秀碁盤を擲遣りて。こハ勇とさるに足らず。と刃の截味見ん。といひあへず倶利迦羅の刀を拔て青銅の燭臺と碾と砍るに草を刈よりいと易く。燈ハ真直に落て。その燭ハ更に滅ざりけり。判五ハ縡の形勢に驚ておそれて額を著き。君ハ正く天神の提利疑ひなし。かゝる圖らずもあなたに借て。わが女児ハいのちをさへ一郷の毒を除るゝ是衆人の欽び。併友鶴が年来信ずる地蔵菩薩の引接利益欽。俟とも得ぞ容へに。まづ夜飯を進らせん。浴湯の加減もよろしかり。途の疲労を休て。こゝろ任せに赴玉へ。といふに義秀ハあへず。遅きとき今愛を織されてとのやあらん。夜食もいまだ欲からず。酒あらバ出し玉へ。一碗を傾ば只一碗の力をまし一斗を竭せバ一斗の勇あり。かゝる時にハ大盃こそよかれとて。といひつゝ判五ハよろこび欽びあひて。と答て慮しく掌慇しく老僕を召て云云と分付るに老僕ハさらに小廝ホ八次の房に宿鞴使して。義秀が勇力武藝を讃しくかいつゝハ食欽びて瞬間に酒を温め肴を按排して。あるじと共に眥待するぞ。義秀ハ些も辭ず大盃を引受く。三度喫て舌うち鳴らし兵粮へさへや縡足ぬ。あるじの翁に向ひて。これ迄あるじ小廝二人に竹輿を舁せて。郷導をさせ。奴ハ竹輿へ令愛を乗せてその他のものハわれとも要に送らせし件の三人をのがれ卒太が宿所より五七町あるきに入らば、某既に令愛を救ひとらバ暗号にせん猛火狼煙にて合図あらバ彼処に走り集るべし。かくて在る利とるものを擇ぐ衆人と鋭示せバ判五ハ老僕と商量し根ぬ平かなるよき事。そのものどもを召出せバ義秀是をちかく招きて。盃をとらせて説示きこゆ初のごとく件の二人の郷導させて劔の山麓へ赴く折しも夜ハまだ夜中のあたりなり。

朝夷巡嶋記全傳第二編巻之二　終

鎌倉和田会
懐徳園

早稲田大学図書館
011888007220